

『神風』と日本文化

石原 純

今の世のなかはずばらしい勢いで進歩してゆくと云う。それは確かに本当であるに違いない。十二年前にはよその国で出来た飛行機を使って、ざつと二ヶ月もかかつて、それで漸く日本からヨーロッパ迄辿り着くことができた。と云うのに、今度は自分の国で立派なものを造り上げて、しかもそれで欧亜連絡飛行の記録を立てることができたというのは、非常な進歩を示す事実としても、ともかくも驚かされる訳である。『神風』の成功ほど日本の力を世界の人々に明らかにしたものはあるまい。

だから、『神風』が今颯爽とした姿で帰つて来た上での、この盛んな歓迎も固より当然のことであり、連日の全紙面をその誉れある記事で埋め盡している「朝日」社の得意さも十分に肯かれてよいことである。だが、人々はいう迄もなくそうした喜ばしさに酔いしれてばかりいてはならない。科学的な冷静な頭で、もう一度この事実をふり返つてよく考えて見なくてはいけない。

『神風』の成功のすばらしさは、誰しも言を挟む余地を見出ださないのである。併し『神風』がアジア・ヨーロッパの連絡飛行に記録を立てることができたのは、日本の地理的環境の特殊性のお蔭であつて、特別に日本の飛行機や飛行家が世界に抜きんでて優れているのを示すには足りないといった人もある。それはちようど日本の動植物学者が西洋の学問を学んで、日本で多くの動植物の新種を発見したからといつて、それで西洋の学者より偉いというわけにはゆかないのと同じであるというのである。

なるほど、かような事がらが地理的特殊性による要素を大いに含んでいるのは確かで、それを漫然と、否殊更ことごとくに見遁みのがすのはいけない。日本の国が大昔から一度も他国から侵略されなかつたと云うことだつてそれに依るのであるし、同時に科学が日本に発達しなかつたことも、またそれに大きな原因を歸しなくてはなるまい。

もう一つこういう事実もある。『神風』がヨーロッパへ行つて歸つて来たのは、僅に一個月半の間であるが、その前後の幾月かを見ただけでも、日本の内地ではかなりの数の飛行機が墜落遭難の運命に遇っている。そのなかには不可抗力と言ふべき場合もあつたかも知れないが、必ずしもそうばかりではないに違いない。

して見ると『神風』の例だけで、日本の飛行機が全体として優れていると歸結するにはなお少しく早過ぎる。何が日本において屢々しばしばこういう不幸を由来するのであるかを、もつと深く立ち入つて研究することも大いに必要なのである。

飛行機の事ばかりには限らない。あらゆる科学的な施設が、日本でも世界で眼につくように進んで来てはいるが、どれを見ても一通り世界の水準並に、まさにとどくかとどかぬかと云う辺あたりに止まつていて、それを確かに飛び抜けたものの殆どほとんないと云うのが、偽らない姿であろう。そこで私は、ギリシヤの昔のツエノンの寓話を想い出さないわけにはゆかない。すてきに足のはやいアキレスという人間が、のそのそ歩く亀を追いかけてゆくのに、最初の間隔の半分をアキレスが進む間に亀はいくらかでも先へ歩いてゆく。その次の半分でも、その次の半分でも之これと同じだから、結局幾度繰返してもアキレスは亀を追い越すことはできないのである。亀でなくて向うがもつと速く歩いたら、之これはもはや一片の迷理ではなくなる。それは即ち模倣者の悲哀であつて、模倣に終始したのでは遂ついに一步を先んずるわけにはゆかない。

お羞かしい話だが、私はまだ飛行機に乗った経験がない。よく晴れた青空に好調子に乗って飛びあがって、広い大地や海を見降したなら、どんなに快いことだろうと、時々爆音を発して頭の上を飛び過ぎる飛行機を仰視しながら想像している。『神風』の帰還飛行の際の飯沼、塚越西氏の手記を見ても、諸処にその様子を窺うことができる。「タラント湾でイタリヤの騷逐艦、巡洋艦が艦隊訓練をして白浪を蹴立てて煙幕を張っているのが珍しく面白い。此処から空は青く快晴が続く。高度四千メートル、得意の高空へ上って『神風』はやっと順調な快い活動を続ける。」「天気好く、『神風』は好調なので、つい居眠りをしたくなる。」「この前は雲にかくれていたギリシャの山々も今日はその異様な断崖に夕日を浴びて紫に輝いている。」こんな大きな自然の美しさは、とても言葉では十分に云いあらわせないほどであろう。

だが然し有様はすばやく変ってゆくのである。陰鬱な雲に包まれて視界が全く閉ざされたり、悪気流に出遇って機体がひどく動揺したりすれば、さすがに空の上での心細さは堪えきれぬに違いない。おまけに身体の疲労が加わったり、ややもすれば発動機の調子も狂わぬとは限らない。どんなに熟練した飛行士でもあらゆる悪条件のもとにおかれたなら、せつかくの目的を達することもできなくなる。そういう時に何よりも大切なのは恐らく周到な判断と沈着な処置とであろう。それは決して口にする程容易いものではあるまいが、然しそれらの点で信頼し得る飛行士は日本に必ずしも少くはないであろうと思われる。

或る人は、発動機の故障を、その爆音の変化で聞き分けるには、音楽の素養をもつ耳が必要なので、日本人がその素養に缺けていることが特に飛行機の事故を多くしているのではあるまいかと疑っているが、私は少し感覚の鋭敏な人ならば、発動機の調子の変化を聞き分けるくらいには、直きに熟練し得るに違いないと想像する。しかも日本人は昔からそういう天分にかなり優れているのを、多くの例で見ることができし、感覚の細かさには決して缺けてはいないのである。それから危急に処して沈着さを失わないという点についても、それを日本人の一つの誇り

とするに足ることは、多分おおくの人が認めているであろう。

日本の古来の文化を見わたしてゆくと、もう一つ眼立っているのは、日本人の器用さである。いろいろな細かい技術を実に手際よくこなしているには驚かされる。だからいつも外国の技術を輸入して、直ぐにそれを自分のものにする事ができるばかりでなく、それ以上に達する場合も決して^{すく}尠なくない。

僅かの年月の間に、日本で優れた飛行機がつくられるようになったのも、その一例に過ぎない。そうした技術の点では、我々は寧ろ^{むし}安心してもよい程である。

ところが一番懸念されるのは独創的な工夫である。現に今日の科学文化をつくっているものがすべて西洋の発明ではないのは、我が国が科学の上の後進国であるということで一応の^{べんめい}辯明は立つにしても、その有様をいつ迄続けねばならぬかということが、確かに最大の危惧なのである。

我々はツエノンの論理を打破る実証を一日も早く示さなくてはならない。それには科学が今のような有様ではとても十分でないということは、私が改めてここに説く迄もない次第である。『神風』の成功を見るにつけても、私はひた向きにこの感を深くしないわけにはゆかない。

(昭和十二年五月)

- 底本には、『科学のために』（科学主義工業社、一九四一（昭和十六）年一月二十五日）を使用した。
- 読みやすさのために適宜振り仮名を追加した。
- 旧漢字は新漢字に、旧かな使いは新かな使いに変更した。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{dvi}2\text{pdf}^{\text{m}}\text{x}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。